

# 熊本の自閉症児療育学生ボランティア活動の歩み

篠崎 久五・一門 恵子\*・服部 陵子\*\*・鳥岡 信孝\*\*\*  
河田 将一\*\*\*\*・天津 透彦\*\*\*\*

## I. はじめに

わが国の自閉症児の療育活動の歴史の中で、とりわけ療育機関がほとんど皆無の状態に近かった初期における学生ボランティアの活動の貢献を見落とすことはできない。平井信義(1968)は早稲田大学学生による「自閉症研究会」の活動内容に触れ、その治療的家庭教師の役割の意義について指摘している。また村田豊久他(1975)は精神科や小児科の医師、臨床心理士、教師、看護婦などのいわゆる専門家と学生を含むボランティアによる自閉症児の集団治療を実施した結果について詳述している。1960年代後半から70年代前半にかけて、全国的に各地で手探りの状況下で自閉症児に対する療育活動が、少数の専門家と学生によるボランティア活動をとおして行われるようになった。当時は専門的な療育機関は皆無の状況に等しく、まさに地域療育ボランティア活動の先駆けとなった。しかしながら自閉症児を含むさまざまな療育機関が整備されるにつれて、その活動は今や補完的な務めを終えてしまったかのようになっている。

本論では1972年に組織され、現在もおお継続している熊本県における自閉症児療育のための学生ボランティア団体(熊本県自閉症研究会セラピスト会)の活動について、その経緯をたどりながら、今日、障害児療育において果たしうる学生ボランティアの役割について考察する。

## II. 熊本県自閉症児親の会と熊本県自閉症研究会の結成

熊本で自閉症児の診療が最初に行われるようになったのは、1970年ごろのことであった(服部陵子1981, 1992)。当時の診療機関としては熊本大学体質医学研究所や熊本県中央児童相談所(以下児童相談所と省略)などがあげられる。その翌年の1971年8月、熊本県自閉症児親の会(以下親の会と省略)と相前後して、熊本県自閉症研究会(以下研究会と略称)が結成された(篠崎久五1975; 服部陵子1981)。いずれも発足の会場となったのは児童相談所であり、相談所を媒介にして親の会と研究会は当初から連携していった。その研究会から後に自閉症児療育学生ボランティア団体としてのセラピスト会が発足する。表1に年表を示す。

研究会は特別に会則もなく、会費も徴収しないという、自閉症児の療育に関心をもつ者たちの自発的な集団であった。当初研究会のメンバーは児童相談所員、医師、大学教員、学生など計20名足らずの少人数であったが、1年後の1972年には56名と3倍以上に急増した。自閉症児の受け入れに積極的な関心を持つ小・中学校特殊学級、養護学校、幼稚園の教員、通園施設の指導員などが新しく参入した。大部分は熊本市内とその近郊からの参加者であったが、数10キロ離れた幼稚園の園長外教員など園を挙げての入会もあった。

\*九州ルーテル学院大学 \*\*はっとり心療内科 \*\*\*菊陽病院 \*\*\*\*熊本県自閉症研究会セラピスト会

親の会は、研究会の発足の2ヶ月後に結成されたが、それは自閉症児親の会全国協議会（現社団法人日本自閉症協会、1968）が発足してから4年後になる。ちなみに自閉症児者親の会九州地区協議会は1974年に結成されている。親の会と研究会は連携して、教育権の確立を求めて自閉症児を就学猶予・免除にしない運動を内外に行っていた。1972年当時は県下ではじめて情緒障害の特殊学級が熊本市立五福小学校に開設されたばかりで、その他知的障害の特殊学級やとりわけ養護学校（2校）の設置も不十分で、自閉症児は全般的に学校への就学が困難な状況であった。幼稚園や保育所へも受け入れてもらえず、啓蒙活動を行っていくことも親の会と研究会の重要な活動指針となった。

表1. 熊本県自閉症児療育学生ボランティア活動の年表

	(熊本)	(九州)	(全国)
1967 (昭42)			自閉症児親の会全国協議会→日本自閉症協会 (平元)
1968 (昭43)			全国情緒障害教育研究会、小児自閉症(平井;日本小児医事) 早稲田大学自閉症研究会 (家庭教師)
1969 (昭44)			情緒障害学級 (杉並区立堀之内小)
1970 (昭45)			第1回自閉症児療育キャンプ (朝日新聞社西部厚生文化事業団)
1971 (昭46)			自閉症研究会 (46.6)、自閉症児親の会 (46.8)
1972 (昭47)			第1回自閉症児療育キャンプ (阿蘇、やまなみ荘) 五福小情緒障害学級開設
1974 (昭49)			画図幼稚園障害児保育
1975 (昭50)			西原幼稚園障害児保育、健軍小情緒障害学級開設 第1回九州地区自閉症研究協議会 (福岡) ひろっば (第1号、熊本県自閉症児親の会)
1976 (昭51)			土曜学級→2学級 (五福・体研) 第2回九州地区自閉症研究協議会 (阿蘇) 大江保育園障害児保育
1977 (昭52)			土曜学級→親子学級と改称 (熊大・附養・熊養・五福・児相)
1978 (昭53)			熊養グループ→西原幼に変更、大津学グループ、自閉症セラピスト会活動報告
1979 (昭54)			西原幼グループ→精更相グループ→希望荘グループに変更
1981 (昭56)			「熊本子ども白書」
1984 (昭59)			第1回自閉症児実験心理療育キャンプ (身体障害者福祉センター)
1987 (昭62)			自閉症者更生施設「三気の里」 第12回九州・山口地区自閉症研究協議会 (熊本)
1989 (平元)			セラピスト会、ソロプチミスト日本財団青少年ボランティア賞(グループ)受賞
1990 (平2)			「ボランティア活動の経験—自閉症研究会—について (山口真司) 親子学級を3学級から1学級に統合
1993 (平5)			自閉症児通園施設「三気の家」開設
1995 (平7)			第19回九州・山口地区自閉症研究協議会 (熊本)
1998 (平8)			自閉症者授産 (通所) 施設「野々島学園」開設
2000 (平12)			第29回自閉症児療育キャンプ (自然の里)

### Ⅲ. 研究会の活動内容

研究会は親の会への支援を旨としながら、以下の活動を行うようにした。

- (1)プレイセラピー…自閉症児に対する個別・集団療育活動
  - (2)木曜研究会…文献研究やケース・スタディなど会員相互の研修を中心とした集い
  - (3)療育キャンプ（やまびこキャンプ）…自閉症児とその保護者を対象とした夏期の療育キャンプ
- プレイセラピーは、毎週1回1時間、3-7歳の15名の自閉症児を対象に個別に時間を設定して心理療法や行動療法を実施した。当初はセラピストとして、児童相談所員、医師、大学教官など専門スタッフ7名と学生スタッフ10名が担当した。学生の中1名を除いた外はすべて熊本大学（以下熊大と略称）の学生で、専門スタッフのスーパーバイズを受けながらセラピーを行った。以上の個別セラピーとは別に、児童相談所で親の会の月例会が開かれる日に親と同道した子どもたちをグループとして、個別セラピーを担当していた学生たちが中心になって会場のプレイルームでみることにした。やがてこのグループ保育を、毎月1回から2回に、さらに1973年からは4回、毎週土曜日に行うようにして、その活動を土曜学級として位置づけた。自閉症児への療育の機会をいくらかでも増やし、充実していこうとする意図からであった。

土曜学級では、親の集団カウンセリングやスーパービジョンを専門職のスタッフで担当し、学生はセラピストとして、それぞれ自閉症児に対してマンツーマンをベースに関わりながら、集団場面の中での個別指導の役割を担った。また土曜学級の会場を児童相談所から熊本市立城東小学校に、さらに五福小学校へと変更した。いずれも研究会員であった両校特殊学級担任を介してのことであったが、その後も長年にわたって会場の借用には多くの労を重ねた。

木曜研究会は、年5-10回、第3木曜日に開催したが、その中では自閉症の原因・診断・療育の実際などについての論文抄読やケースレポートなどの発表と討議がなされた。自閉症の診断・症状理解から行動療法・学習指導・保育に至るまで、提案者は研究者や現場の実践者がなることが多く、同研究会の中では学生は受動的なリスナーになりがちであった。そこで学生が卒業論文で自閉症を扱ったものについて年度末にその内容を発表するように取り決めるなどして、積極的な関与ができるようにした。

療育キャンプは、1972年8月、親の会と研究会の共催で児童相談所と熊本日日新聞の後援を受けて、阿蘇の県保養所で行ったのが最初で、親子合同のキャンプ（2泊3日）であった。同キャンプの目的は、専門スタッフやセラピストが通常の療育の機会では得がたい子どもの就寝・起床・食事・排泄などの問題についての直接観察による情報を得ることやそれぞれの機関で実践されてきた療育についての相互理解や親同士の連携の強化と情報交換を図ることなどであった。

### Ⅳ. 自閉症児療育学生ボランティア団体（セラピスト会）の組織化

上述したように1970年になると、研究会活動の中でセラピストとしての学生の役割が明確化され、学生数も増大して行く一方で、初めて経験する自閉症という重篤な対人関係障害をもつ子どもの対応の難しさを実感していた学生間に、熊本県自閉症研究会セラピスト会（以下セラピスト会と省略）が自発的に組織されたのであった。後にセラピスト会の最初のリーダーとなった熊大教育学部特殊教育科（現障害児教育科）学生の西晴雄（1972）は、福岡県飯塚市八木山で開催された朝日新聞厚生文化事業団主催の自閉症児療育キャンプ（以下朝日キャンプと省略）に自主的に参加し、その意義やプログラムに触れながら、出会った子どもたちの症状の特異性と多様性について、第1回療育キャンプの準備会の席上で述べている。セラピーの中では殆ど人に対して関

心を示さなかった子どもが、たまたまホテルの管理人の子どもと親しく交流している場面を観察したり、またセラピーの中でボールのやりとりをとおして子どもとの関係がつけられていったことを実体験している。その後、西は他の学生たちとセラピスト会の結成について協議したものとされる。

1972年12月、かくてセラピスト会は発足した。設立当初のセラピスト会の構成員は27名を数え、そのうち、大半が熊大の学生であり、他は県立保母養成所（現県立保育大学校）、九州女学院短期大学（現九州ルーテル学院大学）、熊本短期大学（現熊本学園大学短期大学部）の学生であった。また熊大の学生の殆どは、著者らが所属していた教育学部特殊教育科の学生であった。セラピスト会では、リーダーのもとに土曜学級やキャンプなどの準備や学習会を開くようになった。原則として毎週水曜日の夜、開かれる学習会では土曜学級で担当している子どもの事例についての検討や自閉症の基礎的な理解を図るための勉強会であった。

1973年から2年間、セラピスト会に属していた高瀬徹也（1974）は、親の会の機関紙「ひろっば」に、自閉症児の学生セラピストとしての在り方について提案している。セラピーをとおして、子どもに明らかに有効な働きかけ方を見出すことができない難しさに触れながら、決定的な治療法が無い現在、学生の「物事に対する甘さ」を逆に学生の特権として、学生らしい若さを活かしたセラピーを追究すべきであるとしている。

当時、セラピストという用語が自閉症児の療育に直接携わる者のことを指して慣用されており、研究会でも他に適当なことばが見当たらずに同様に用いられていたのが、学生にとって少なからず負担になっていたようである。その後セラピストに代わることばとしてトレーナーとかヘルパーという用語も試みられたが、実際には直接、学生ということばがもっとも一般的に用いられた。

## V. セラピスト会の拡大—土曜学級から親子学級へ

セラピスト会が発足する前年の1971年から発足後3年間は、熊大の学生が過半数以上を占めていたが、1976年からは急速に学生数が増え、熊大の外に、保母養成所と九州女学院短期大学の2校の学生が継続的にセラピスト会に入会するようになり、各大学内のセラピスト会の組織化が確立したと言える。まず3つの大学でそれぞれにリーダーが選出される。さらにその中から全体のリーダーが決められ、熊大から全体のリーダーが選ばれている。各リーダーの選出の学年と任期は、概ね熊大からは2年次に選出されて3年次の後期には交代し、短大などは2年次に選出、任期は1年間で、下学年に引き継ぐことなど不文律となっている。学生という限定された期間の中での療育ボランティア活動であるだけに、各大学のリーダーは、新人生などに対する積極的な広報活動に携わることも要請される。

このようにしてセラピスト会は拡大していった。セラピスト会の学生数の増大は、一方で対象となる自閉症児の数の増大であり、セラピーを受けたいという保護者、すなわち親の会の会員数の増大を意味していた。幼児と学童を分けないで行われていた土曜学級のプレイルーム（2ヶ所）は、子どもとセラピストたちで溢れ、野外活動を多く取り入れるなどの対応をしていたが、すでに治療的な環境を維持する点で限界に達していた。そこで1977年からは幼児のみを対象に親子学級として、熊大の学級・附養学級・熊養学級・五福学級・児相学級の5学級に、各学校や児童相談所の施設の一部を借用して増級し、1学級10名を目安に分散するようにした。土曜学級から親子学級へと改称されたのは、子どものセラピーと同様に親のカウンセリングや親同士のミーティングなど、子どもを含めた家族との関わりを重視していこうという動機からであった。セラピーは

学生スタッフが、カウンセリングは専門スタッフが担当した。また兄弟姉妹も自閉症児のセラピー場面に入っていけるようにした。兄弟姉妹は自発的に参加し、自閉症児の良いモデリングの対象にもなった。学齢児は親子学級の対象外であったが、通常の学級で指導を受けている自閉症児が、情緒障害学級に制度上、通級できなくなっからは、親の強い要望で学童学級として今日まで存続している。

1982年の学生数129名をピークに1976から1988年の12年間はセラピスト会の最盛期となった。この間のセラピスト会活動報告(1978)から親子学級のプログラムの一つをあげると表2のようになる。詳細については各学級によって異なるものの、概ねサーキットや遊戯などの集団活動をメインに、動作模倣や絵・文字・数についてカードを用いた課題学習や自由遊びなどの個別活動がその内容となる。集団学習と個別学習の比重は、各学級で確保できる部屋数によって異なる。またこの間、親はグループ・カウンセリングや養育・就学などの情報交換を行うようにした。

表2. 附養学級のプログラム

13:15	学生集合(打ち合わせ、準備)
13:40	子どもを受け取る
13:45	着替え(訓練として行う)
13:55	フリー(個別指導)
14:20	集団 <ul style="list-style-type: none"> <li>・お返事</li> <li>・かけっこ</li> <li>・行進</li> <li>・サーキット</li> <li>・お遊戯(手をつなごう、カモメの水兵さん)</li> </ul>
14:40	手を洗う
14:45	おやつ
15:00	着替え(訓練として行う)
15:10	お帰りの歌、あいさつ
15:15	掃除、反省会(学生・先生)

当時の研究会活動全体について、かつて熊大セラピストで専門スタッフとなった中村立行(1987)は、その評価と今後の課題を次のようにまとめている。(1)幼児期の療育機能を果たしたが、さらに加齢化する子どもにどのように対応するか、(2)療育ボランティアと家族間に子どもをとおして親密な関係がつけられ、また親同士の連携が強まり情報交換の場となった。今後の課題として、兄弟姉妹の問題や地域の中でのサポートの問題などがあげられた。(3)学生ボランティアにとって大学の講義では経験できない学習や研修の機会となり、将来の職業生活の糧となったとして、今後さらにトレーナーとしての資質の向上を図るための研修の充実を課題としてあげ、ボランティア活動ゆえの不充分さや不安定さを指摘しながらも、全体として自由な「温もりのある」活動となっていると総括している。

## VI. セラピスト会の消長

表3は、所属別にセラピスト会の学生数とその構成比を年度別に示したものである。1987年からのセラピスト会の学生数の減少が顕著に見られ、1990、91年に最低数となっている(図1)。

この間の変化は熊大生とその他の短大生との人数の割合に見られ、前者が保育大生よりも少なくなっている。その原因としては、ダウン症研究会をはじめ新たに結成されたLIG（言語障害児療育グループ）や重複障害研究会など他の障害児療育学生ボランティアのサークルとの競合の問題のほかに、部活を含む全般的な熊大生のボランティア離れなどが考えられた。セラピスト会のメンバーは、会活動の紹介のパンフレットや収録ビデオを製作したりするなど、新入会員の開拓のために大きなエネルギーを費やし、そのためか定かではないが数名の学生は留年すらしている。皮肉にも1989年にはこれまでのセラピスト会の活動が評価されて、財団法人ソロブチミスト日本財団より、青少年ボランティア賞（グループ）が熊本県白閉症研究会セラピスト会に授与され、当時のグループリーダー長谷川英治に手渡されている。

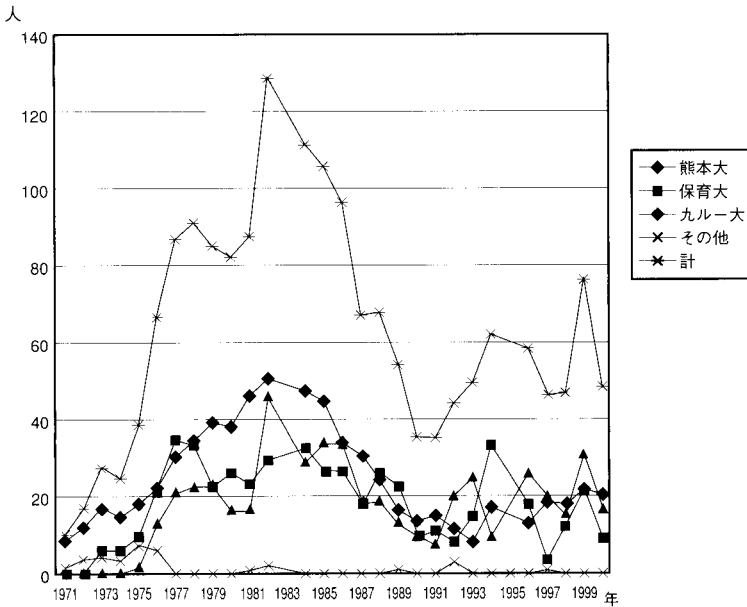
服部陵子（1991）は4月14日付の熊本日日新聞の教育欄に当時の親子学級の窮状について投稿している。その中で学生ボランティアの減少をおそらく現代の学生気質の変化によるのであろうとして、「苦勞の多い障害児の指導に無報酬で当たるよりは、アルバイトで小遣いを稼ぎ、旅行やファッション、ときには生活費に充てる方が現代的な生き方であろう」と痛烈に批判し、他方で「近年の学生は多方面で多忙である。これらは責めるべき問題ではない」としながら、依然として自閉性障害の問題の重大さと療育学生のボランティア不足を訴え、勧誘している。また同時に学生以外的一般からのボランティアの呼びかけを行うなど当時の療育ボランティアの活動がいかに危機的状態として映ったかを物語っている。

表3. セラピスト会大学別学生数の推移

年度	熊本大		保育大		九ルー大*		その他		計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
1971**	9	90.0	0	0.0	0	0.0	1	10.0	10
1972	12	70.6	1	5.9	0	0.0	4	23.5	17
1973	17	60.7	6	21.4	0	0.0	5	17.9	28
1974	15	60.0	6	24.0	0	0.0	4	16.0	25
1975	18	47.4	10	26.3	2	5.3	8	21.1	38
1976	25	37.3	22	32.8	14	20.9	6	9.0	67
1977	31	35.6	35	40.2	21	24.1	0	0.0	87
1978	35	38.5	33	36.3	23	25.3	0	0.0	91
1979	40	47.1	22	25.9	23	27.1	0	0.0	85
1980	39	47.6	27	32.9	16	19.5	0	0.0	82
1981	47	53.4	23	26.1	17	19.3	1	1.1	88
1982	51	39.5	30	23.3	45	34.9	3	2.3	129
1983									102
1984	48	43.2	33	29.7	30	27.0	0	0.0	111
1985	45	42.5	27	25.5	34	32.1	0	0.0	106
1986	35	36.5	27	28.1	34	35.4	0	0.0	96
1987	31	46.3	17	25.4	19	28.4	0	0.0	67
1988	23	33.3	27	39.1	19	27.5	0	0.0	69
1989	17	30.9	23	41.8	14	25.5	1	1.8	55
1990	15	41.7	10	27.8	11	30.6	0	0.0	36
1991	16	44.4	12	33.3	8	22.2	0	0.0	36
1992	12	26.1	9	19.6	21	45.7	4	8.7	46
1993	9	17.6	16	31.4	26	51.0	0	0.0	51
1994	18	28.6	34	54.0	11	17.5	0	0.0	63
1995									
1996	14	23.7	18	30.5	27	45.8	0	0.0	59
1997	20	42.6	5	10.6	21	44.7	1	2.1	47
1998	19	39.6	13	27.1	16	33.3	0	0.0	48
1999	23	29.5	23	29.5	32	41.0	0	0.0	78
2000	21	42.9	10	20.4	18	36.7	0	0.0	49

注(1)\*九州ルーテル学院大  
 (2)\*\*セラピスト会結成前の学生数  
 (3)空欄部分は資料不明分

図1. セラピスト会大学別学生数の推移



しかしながらその危機?も事情を知らないままに、ただ人数が少ないためにかえってやり甲斐があると入会した数名の新入生の入会で活気を取り戻し、今日に及んでいる。

## VII. 療育キャンプの変遷

研究会では、親の会をとおして募られた希望者全員を対象に、毎年夏期療育キャンプを実施してきた(表4)。第1-3回までのキャンプは朝日キャンプ(名和、1971)に準じて、親子合同のキャンプの形態をとり、キャンプ長のもとにスーパーバイザー・セラピスト・プログラムマネージャー・プログラムリーダー・マネジメントリーダー・マネージャーのスタッフ構成にした。各自閉症児にマンツーマンで学生のセラピストがつくようにし、フリータイムは親と交代でみるようにした。また他の数名の学生はマネージャーとして備品の管理や運搬などに携わった。親の集いやカウンセリング・心理劇・発達療法などの心理療法は、スーパーバイザーが主宰・担当した。表5に第1回日(1972)のプログラムを示す。実際のキャンプの企画・準備・運営のすべての面で、セラピスト会学生は重要な役割を果たし、また今後一層の学生の自主的参加が期待されるという旨の提案がされた(第2回キャンプ準備委員会資料)。

第3回目からのキャンプは、子どもの年齢や能力を考慮に入れて6・7名の小グループ編制にし、それぞれに卒業生などの専門スタッフをグループリーダーとして、グループ機能を強化することにした。子どもが就寝後のミーティングもグループ・ミーティングの時間を設けて、各グループのセラピスト学生をサポートできるようにした。

第4・5回のキャンプは親子分離方式にして、親は子どもから離れて宿舎を取りながら様子を見るようにした。親と子が別々に起居するという経験は、自閉症児と親にとっては初めての経験であり、親の不安を軽減するために連絡員(学生)を置いて子どもの様子を報せるように配慮した。それによって短期間の自立的な生活体験をすることと、親同士の連携をさらに深めていこうとする意図からであった。親子学級が発足した1977年の第6回と7回(1978)のキャンプは、自

表4. 自閉症児療育キャンプの推移

	年度	期 日	場 所	参加者				備 考
				子供	学生	専門	親	
1	1972	7.21~23	阿蘇保養所山なみ荘	14	18	14	有	親子合同運動会・交歓の夕べ
2	1973	7.23~25	阿蘇保養所山なみ荘	17	26	12	有	
3	1974	7.27~29	阿蘇保養所山なみ荘	21	26	26	有	
4	1975	7.23~27	阿蘇保養所山なみ荘	30	41	27	無	親子分離(親は火の山荘)、親→心理劇
5	1976	7.29~31	金峰山少年自然の家	49	69	32	有	
6	1977	8. 9~10	金峰山少年自然の家	31	77	32	有	幼児(2本立て)
		8.10~11	金峰山少年自然の家	47			有	学童
7	1978	7.23~25	日立造船・阿蘇三学舎	36			無	学童(働く自閉症児)
		8.22~24	阿蘇保養所山なみ荘	33			有	幼児(育つ自閉症児)
8	1979	8.27~29	菊池少年自然の家	45			有	学童
9	1980	8.22~25	日立造船・阿蘇三学舎	45			無	学童
10	1981	8.11~14	阿蘇三学舎	46			無	学童
11	1982	8.10~13	阿蘇三学舎	23	25	28	無	学童
12	1983	8.11~14	阿蘇三学舎	31	63	20	無	学童
		8.23~25	阿蘇三学舎	20	15	12	無	年長
13	1984	8.11~13	阿蘇三学舎	44			無	学童
		8.16~18	矢谷溪谷キャンプ場	23	44	6	無	年長
14	1985	8. 9~11	阿蘇三学舎	33	44	25	無	学童
		8.18~20	矢谷溪谷キャンプ場	12			無	年長
15	1986	8.10~12	阿蘇三学舎	39	39	8	無	学童
		8.18~20	矢谷溪谷キャンプ場	15	39	9	無	年長
16	1987	8. 9~12	阿蘇三学舎	19	27	2	無	学童(低学年)
		8. 9~12	弥護山自然公園	16	22	5	無	学童(高学年)
		7.27~30	矢谷溪谷キャンプ場	15	29	4	無	年長
17	1988	8. 1~ 3	矢谷溪谷キャンプ場	12	23	4	無	学童(高学年)
		8. 2~ 3	阿蘇三学舎	11	17	3	無	学童(低学年)
		8.21~24	矢谷溪谷キャンプ場	14	21	5	無	学童・年長
18	1989	8. 2~ 4	矢谷溪谷キャンプ場	18	20	2	無	学童・年長
		8. 7~ 9	矢谷溪谷キャンプ場	16	17	4	無	学童
19	1990	8.16~18	矢谷溪谷キャンプ場	37	32	17	無	学童・年長
20	1991	8.10~12	阿蘇産山民宿	20	32	2	無	学童・年長、菊池女子高校との交流
21	1992	8.17~19	矢谷溪谷キャンプ場	23	34	16	無	年長
22	1993	8. 9~11	矢谷溪谷キャンプ場	22	27	13	無	学童・年長
23	1994	8.10~12	矢谷溪谷キャンプ場	15	46	14	無	学童・年長
24	1995	8.25~27	三角自然の里	24	37	12	無	学童・年長
25	1996	8.23~25	三角自然の里	25	31	10	無	学童・年長
26	1997	8. 8~10	三角自然の里	25	31	10	無	学童・年長
27	1998	8.21~23	三角自然の里	33	56	9	有	幼児・学童・年長
28	1999	8.17~19	三角自然の里	17	40	11	無	学童・年長
29	2000	8.18~20	三角自然の里	16	38	9	無	学童・年長

注. 空欄部分は資料不明分



表5. 自閉症児療育キャンプ・プログラム (第一回、1972)

	21日(金)	22日(土)	23日(日)
6:00		6:30 起床・健康観察、洗面	
7:00		7:10 朝の集い(体操・散歩)	起床・健康観察、洗面 7:30 朝の集い
8:00		朝食	朝食
9:00		運動会(おやつ)	後片づけ・出発準備 9:30 閉会式
10:00	市民会館前集合 10:30 出発		やまなみ荘出発 10:30 草千里着 自由遊び
11:00	11:45 やまなみ荘到着		
12:00	開会式 12:30 昼食	昼食 12:40 フリータイム	昼食
13:00	13:10 フリータイム	13:30 水遊び(おやつ) 親の集い	13:30 草千里出発
14:00	集団遊び(おやつ) 親のつどい		14:45 市民会館前着
15:00		15:30 フリータイム	解散
16:00	フリータイム 16:30 入浴	16:30 入浴	
17:00	17:30 夕食	17:30 夕食	
18:00	18:10 フリータイム	18:10 フリータイム	
19:00	交歓の夕べ	キャンプファイアー	
20:00	20:30 就寝準備・就寝	20:30 就寝準備・就寝	
21:00	21:10 ミーティング	21:10 ミーティング	
22:00			
23:00	消灯	消灯	

閉症児の人数の増大と年齢差に対応するために、学童と幼児の2本立てのキャンプにして、前者は学童のみ、後者は親子キャンプとして実施した。

さらに1979年(8回目)からは、親子キャンプが各学級単位で1泊2日のミニキャンプ(表では省略した)の形式で行われるようになり、また第12回キャンプからは対象児童の加齢化によって、中学生以上を年長キャンプとして加え、山登りや飯盒すいさんなどがプログラムの中に取り入れられた。このようにして一人の学生が一夏に2回以上のキャンプに参加するようになり、それだけ自閉症児やその対処方法について直接経験を重ねるようになり、また療育キャンプの企画・準備などについて多くのセラピスト会学生が関与するようになった。

セラピスト会が小規模化してからは、研究会のメンバーが中心になりながらも、人員確保のためにそれ以外の学生も参加スタッフに含めるようにした。他の障害児療育グループの学生ボラン

ティアやまったく未経験の学生も積極的に参加して協力した。このことは彼らのためにも自閉症児についての理解が促進され、また学生間に強い連携が築かれて好評であった。したがってセラピスト会学生の少人数化の影響は直接キャンプの実施に大きなマイナスの影響は及ぼさなかったように思われる。

第24回キャンプからは、著者らが障害者の親たちと共同で設営している宇土郡三角町山中の「自然の里」(篠崎久五、1996)に場所を固定して、実施することができるようになり、子どもの療育から食事づくりにいたるまで、すべてセラピスト会学生たちの手で行われるようになった。今回はじめて親子キャンプに地元の数名の中学生が社会福祉協議会が後援しているワークキャンプの一つとして参加して自閉症児やその家族と接し、また学生たちと交流の機会を持つことができた。

## Ⅷ. 障害児療育学生ボランティア活動の意義

### 1. 自閉症児療育の効果

1978年度から1983年度までの6年間のセラピスト会の活動報告から、親子学級の療育効果としてあげられているものを拾ってみると、集団活動の中では、1年間の活動をとおして、全体的に「視線が合うようになった」「返事ができるようになった」「リーダーの言語指示で大部分の子どもが着席できるようになった」「落ちついてきた」「サーキット・遊戯・楽器遊びなどに多くの子どもが参加できるようになった」「かんしゃくが少なくなってきた」などの表記がされ、個別の課題学習では、「ボタンかけ」「型はめ・絵パズル」「色の識別」「数・文字」「ネーミング」「概念形成」「音声模倣・言語理解・会話」などの学習態度や能力の面での向上が見られている。

しかしながら、一方でこのような子どもの行動の改善が、週1回2時間足らずの親子学級の所産というよりは、恐らく毎日通っている幼稚園や保育園、あるいは家庭での指導による成果であろうと、療育活動としての限界についても触れられている。したがって親子学級の活動は、幼稚園や家庭などでの課題をサポートするように子どもへの働きかけを行っていくことが、より効果的であると言える。

また附養学級のリーダーの柳瀬洋一郎(1983)は、家庭や幼稚園での成果を認めながらも、今後は子どもの変化がセラピーの成果であることがはっきりと分かるような課題や内容にすべきだと提案して、学生がマンネリに陥りがちな対応に警告している。週1回の短時間の経験でも、関わりの中での子どもの微細な変化に気づいたり、また、それが繰り返されていくうちに子どもの行動や態度の適応的な変化が見られたりすることを、反省会をとおして専門スタッフや先輩などから聞き、自信をつけていく必要があった。

### 2. 親や家族へのサポート

学生を含む療育ボランティアに対する親の期待は、かつては子どもについての何らかの治療効果を上げてもらいたいという気持ちが強く、その効果が得られずに、武蔵野東幼稚園の早期療育の効果が報せられると、上京して別居し、そこでも期待を裏切られて帰ってくる親子もあった。中には家庭での根気強い地道な取り組みを支える学生を含む療育者との関係がつけられて、比較的良好な結果が得られたケースもあった。

専門的な機関が充実してきた現在では、むしろ若い学生たちが一生懸命に自分たちの子どもを見てくれているという感謝やそれを励ましとする親が多い。親子学級に通級している親を対象にした調査(篠崎久五、1995)では、殆どの親は子どもを保育園や幼稚園または知的障害児通園施

設に通園させ、病院・クリニック・相談所・療育センター・保健所などのいわゆる専門機関や水泳・体操教室などいくつも通わせているケースが多い。その中であって親子学級を親同士の交流や情報交換の機会を提供してくれる場としてもっとも評価しており、親が息抜きできる・安心できる場として位置づけている。またそこで多くの学生たちから自閉症児だけでなく、兄弟姉妹も一緒に楽しく遊び相手になってもらえる安心感を抱いている。

前述したように、学生たちが子どもたちと活動している間、交代で専門スタッフが親のグループ・カウンセリングを担当したが、(1)多動やかんしゃくなど行動改善のための薬物の使用とその効果、(2)不眠への対応、(3)排泄の問題とトイレット・トレーニング、(4)ことばの問題とその対応、(5)家族・兄弟姉妹の問題、(6)となり・近所への適応問題、(7)保育園や幼稚園への適応問題、(8)学校への就学問題、(9)自閉症の原因・予後の問題などが語られた。グループで話し合い、情報交換をすることによって不安が軽減され、連帯感が強められていった。またポータージ (Portage) やティーチ (TEACCH) などのプログラムを用いて、積極的に家庭での自閉症児の養育に当たることができるようにグループ・セッションを設け、対処の方法や養育態度の改善が見られた (松岡宏信 1998)。

### 3. 学生ボランティア自身が学んだもの

セラピストとして学生が活動に参加する動機には、「障害児の教育や福祉に関心があるから」「授業で教官から話を聞いたから」とか、中には「自分の兄弟姉妹が自閉症」であるというシリアスな状況が背景にあるケースなど積極的な動機のほか、「高校時代の先輩や友人」に誘われて入った学生たちである。また、部活動と二またをかけた軽い気持ちで参加したりする学生など、動機は多様であった。

動機は別として、大部分の学生は、セラピスト会の活動をとおして多くのことを学び取り、「子どもたちをはじめお母さん方、先生方、そしてセラピストのみなさんと知り合えたことを、本当にうれしく思っています。かけがえのない経験をさせてもらいました」とある卒業する学生のことばが紹介されている (真有里美、1978)。山口真二 (1990) は、セラピスト会に所属していた卒業生を対象に調査をし、土曜学級あるいは親子学級や療育キャンプなどの活動をとおして、「障害児の家族と親しくなれた」「交友関係が広まり、親友ができた」「自分の生き方に自信ができた」ことを挙げ、卒業後も当時担当していた子どもの家族と付き合いが継続し、年賀状のやりとりをしているなど、在学時のボランティア活動の影響が大きかったことを裏付けている。特に自分たちが中心に計画・実施してきた療育キャンプの経験は強い印象として残っていると述べる者が多い。

以上療育学生ボランティア活動の効果や意義についてふりかえって来たが、種々の専門的な療育体制が整備されてきた今日においても、不十分な活動の場であるにも関わらず、障害児や親・家族がふれあいを求めて集ってくる魅力があるからだと思われる。また障害児について直接勉強している学生たちだけでなく、その他の学生たちも後を絶たない。そのような状況が続く限りこの活動の存在意義はあるということであろう。

## 文献と資料

- (1) 熊本県自閉症研究会セラピスト会 (1978) 自閉症セラピスト会活動報告, 昭和53年度.
- (2) 熊本県自閉症研究会セラピスト会 (1979) 自閉症セラピスト会活動報告, 昭和54年度.
- (3) 熊本県自閉症研究会セラピスト会 (1980) 自閉症セラピスト会活動報告, 昭和55年度.
- (4) 熊本県自閉症研究会セラピスト会 (1981) 自閉症セラピスト会活動報告, 昭和56年度.
- (5) 熊本県自閉症研究会セラピスト会 (1982) 自閉症セラピスト会活動報告, 昭和57年度.
- (6) 熊本県自閉症研究会セラピスト会 (1983) 自閉症セラピスト会活動報告, 昭和58年度.
- (7) 篠崎久五 (1975) 「自閉症研究会について」熊本県自閉症児親の会 ひろっば, 1, 4-5.
- (8) 篠崎久五 (1995) 「親子学級の現状」, 第19回九州・山口地区自閉症研究協議会分科会「幼児教育問題」発表資料.
- (9) 篠崎久五 (1996) 「学校終了後の生涯学習の試み」, 障害者のライフコース (溝上脩編), 川島書店, 151-165.
- (10) 篠崎久五・一門恵子 (1981) 「資料Ⅱ 熊本県下自閉児療育活動の報告」. 国際児童年熊本懇談会編「熊本子ども白書」医療編, 146-151.
- (11) 高瀬徹哉 (1975) 「雑感」熊本県自閉症児親の会 ひろっば, 1, 12-13.
- (12) 中村立行 (1987) 「熊本県における自閉症児・者をめぐるボランティア活動について」第12回九州・山口地区自閉症研究協議会発表資料.
- (13) 名和顕子 (1971) 「自閉症児の療育キャンプ」. 教育と医学, 19, 945-953.
- (14) 西晴雄 (1970) 「自閉症児療育キャンプに参加して」セラピスト会研修発表レジュメ.
- (15) 服部陵子 (1981) 「自閉児の医療と療育の現状—熊本県下自閉児の実態を通して—」. 国際児童年熊本懇談会編「熊本子ども白書」医療編, 137-145.
- (16) 服部陵子 (1992) 「自閉症療育の20年—医療者としての関わりを振り返って—」. 熊本県自閉症児者親の会 (1992). ひろっば, 20周年記念誌, 5-12.
- (17) 眞有里美 (1978) 「一年間をふり返って」自閉症セラピスト会活動報告—昭和53年度, 4-5.
- (18) 松岡宏信 (1998) 「自閉症児を持つ親に対する集団指導—ポーターズ乳幼児教育プログラムを用いて—」. 熊本大学教育学研究科修士論文.
- (19) 村田豊久他 (1975) 「ボランティア活動による自閉症児の集団治療—6年目をむかえた上曜学級の経過—」. 児童精神医学とその近接領域, 16, 152-162.
- (20) 山口貞二 (1990) 「ボランティア活動の経験—自閉症研究会について」. 熊本大学教育学部卒業論文.
- (21) 柳瀬洋一郎 (1978) 「附養学級活動報告」自閉症セラピスト会活動報告—昭和53年度, 8.
- (22) 自閉症児療育キャンプ・プログラム (第1回, 1972)